

「お歯黒」は明治初期まで長い歴史を経て続いていた女性の習慣であった。「お歯黒文化」はむし歯予防の見地からも有効であったといわれている。文字通り、歯を黒く染める風習である。別名「鉄漿(かね)」「かね」「はぐろめ」「歯黒」「涅歯(でっし、ねっし)」とも呼ばれ化粧品一種で、時代の風俗によって歯を黒く染める鉄の溶液や、またそれを使用して歯を染めること、あるいは、染めた歯を示すようである。

お歯黒の起こりは日本古来からあったという説(日本古來說)、南方民族が持って来たという説(南方由來說)、およびインドから大陸、朝鮮を経て日本に伝わったという説(大陸渡來說)がある。この三つの説はいずれも定説がないのが現状であるが、たとえ外国から伝来した風習であるとしてもこれを消化、吸収し、さらに日本特有の文化に練り上げ千年以上の永きにわたり日本婦人の虫歯の予防に役立っていたことは驚嘆に値する。

わが国における「歯黒め、はぐろめ」すなわち涅歯の風習はいつ頃からはじまったのかは詳らかではない。

わが国最古の辞書といわれる 938 年(承平 7 年)刊、源(みなもと) 順(したがう) 著「和名類聚鈔(わみようらいじゅうしょう)」の巻六に「…黒歯(くしの) 国(くに)、東海中にあり。その土俗、草を以て歯を染むる故に曰く。

歯黒は俗に 波(は) 久(く) 路女(ろめ) と云ふ。婦人黒歯具有り。故にこれを取る」の記載があり、少なくとも千年前にはすでに閉仁(べに)、之路岐毛能(しろきもの)、万由須美(まゆずみ)などととも、化粧の道具の一つとしてお歯黒道具のあったことが推察される。

お歯黒をつけることにはいろいろな意義があったが、江戸時代においては既婚婦人のしるしで、まずは白い歯を染めて、「二夫にまみえず」との誓いの意味あいがあった。また、江戸時代の浮世絵には医療を取り扱ったものや 房(ふさ) 楊枝(ようじ)による歯磨き、婦女子のお歯黒などがみられる(写真 1、2)。

お歯黒の歴史

浮世絵で有名な歌麿や春信の美人画をみたことがありますか。なんとなく口元が変なのは歯を真っ黒に描いているためです。これは「お歯黒」といって、江戸時代、結婚した女性に歯を黒く着色する風習があったからです。

わが国におけるお歯黒の歴史は古く、奈良時代に北方民族によって朝鮮半島から伝えられたといわれています。平安時代には貴族階級の間には広がり、男女ともに十七～十八歳で歯を黒く染め成人であることを表していました。

その後、時代とともに染めはじめる年齢が低くなり、室町時代には十三～十四歳に、戦国時代になると武将の娘は早く政略結婚させるために八歳で染めていたといえます。今川義元の肖像画などをみると、成人男子でもお歯黒をしていたことがわかります。

江戸時代に入ると上流社会の生活様式がしだいに一般庶民にも浸透しはじめ、お歯黒は元禄時代には全国各地に広がりました。そしてこの時期に男子のお歯黒は姿を消したのです。

さて女子だけのものになったお歯黒ですが、緻密なエナメル質を染めるのはなかなか骨の折れる仕事でした。

そこで、庶民に広がってからは、女性によって人生の大転換期である婚約・結婚を迎えてはじめて染める風趣となり、ついには既婚女性の象徴となりました。

黒は何色にも染まらない色なので、貞操を意味し、既婚女性の誇り高い心の支えともなっていたようです。一方、封建制度下における女性を、精神的にも外観的にも人妻として制約するための強力な手段であったともいえるでしょう。お歯黒の風習は、明治政府の近代化政策でチョンマゲや帯刀とともに禁止されたので、しだいになくなっていきました。そして、大正時代にはほぼ全国からお歯黒の風習はなくなりました。お歯黒の風習がこのように長い間受け継がれてきたことには、理由があったようです。



写真 1

江戸時代初期から明治にかけて庶民の間で生まれた庶民のための絵画、版画で当時の風俗や生活を描いた風俗画で、浮き世といわれた遊里や歌舞伎の生活風俗を描いたことから、浮世絵とよばれるようになった。これは、お歯黒をつける前に房楊枝で歯の掃除をしているところ。江戸時代 豊國画。

(日本大学松戸歯学部歯学史資料室所蔵)



写真 2

お歯黒をつけているところ。江戸時代。芳年画。
(日本大学松戸歯学部歯学史資料室所蔵)





最近、スクリーンやブラウン管で活躍する女優さんを見ると皆例外なく白く輝く美しい歯をしています。私たちの歯科医院でも、最近とくに『白い歯』を求める患者さんが増えています。そして患者さんが美容の一部として歯の美しさを求める傾向が強くなっているのを感じます。

ところが、わが国では江戸時代までは特に女性の伝統化粧のひとつとして歯を黒く染める『お歯黒』が広く一般に定着していました。歯に対する美意識がここ100年の間に『黒い歯』から『白い歯』へと対極にあるものへと一変してしまったのです。

日本審美歯科協会ではこれから連載で『お歯黒』についてさまざまな角度から分析しつつ、皆様といっしょに審美について考えてみたいと思います。

東洋には、古来からお歯黒、薬木の歯ブラシ(楊枝)、噛む生薬などの習慣があり、いずれも虫歯や歯周炎の予防に貢献していました。中でもお歯黒の効果はもっとも顕著であり、それはお歯黒の成分によるものと考えられています。

お歯黒の成分は、鉄奨水(かねみず)と五倍子粉(ふしこ)からなっています。ふしこは、うるし科のふしこという木をアブラムシが刺激して出来た樹液の固まりを蒸して粉にしたものです。かねみずの主成分は酢酸第一鉄、ふしこの主成分はタンニン酸であり、これらがエナメル質に浸透して虫歯を予防していたと考えられています。

お歯黒の歴史

AD3世紀ごろ	古墳内の人骨にお歯黒の形跡が見られる。
7世紀	聖徳太子にお歯黒の習慣があった。
8世紀	古事記-第15 応神天皇の歌にお歯黒が歌われている。
平安時代	貴族女子の成人の儀式として定着した。 鳥羽天皇時代、花園左大臣有仁卿がお歯黒をつけ、男性にも広がった。
平安末期	「延響録」「源平盛衰記」「平家物語」「義経記」等に武士にもお歯黒が広まったとの記載あり。
戦国時代	お歯黒が 成人の儀式 として定着。戦略結婚のため10歳にも満たない子にお歯黒をつけて成人と見なした。
江戸時代	女性のお歯黒が既婚女性を表すようになり、男性のお歯黒は減少した。
明治初頭	貴族・皇族に相次いでお歯黒禁止令が出され一般国民もお歯黒を止めるようになった。
大正時代	明治末期に「インスタントお歯黒」が発明され、一時流行するが大正時代末期には殆ど見られなくなった。

お歯黒道具～「鉄奨(かね)」つけ道具については、以下のものがあります。

- (1) 耳盥(みみだらい)、角盥(つのたらい)
- (2) 渡し金……耳盥の上に乗せ筆などを置く。
- (3) 五倍子粉(タンニン*注)と「ふしこ」入れ。
- (4) かねわかし、かねつけ碗
- (5) お歯黒壺(かねつぼ)
- (6) お歯黒筆
- (7) お歯黒箱、長箱



かねみずの作り方

かねみず(鉄槳水)の作り方やつけ方には秘伝と称するものがあり、これらが新世帯の若奥さんに対するお姑さんの自慢の種でした。「新世帯鉄槳の話聞き飽きる」と言う川柳がよく物語っています。かねみずの作り方は各家庭で少しずつ違っていましたが、基本はほぼ同じ物でした。以下に、典型的な例をご紹介します。

●まず茶を沸騰させ、その中に焼いた古釘をいれ、飴、麴(こうじ)、砂糖を以下の割合で入れてお歯黒水を作ります。

茶:五合 古釘:20~30本 飴:五匁(もんめ) 麴:五匁(しゃく) 砂糖:一匁

ここに少量の酒を加えることもあります。これらを密封して2~3ヶ月冷暗所に保存します。次第に鉄はサビが出て水は茶褐色になります。また一種の特有で強烈な悪臭があるそうです。

ふしこの作り方

ふしこ(五倍子粉)は約60%のタンニン(渋)を含む黄色の粉末です。

その原料は、野山で生えている「ふしの木」(うるし科)の幹をアブラムシの一種が刺し、この穴から流れ出て乾燥した樹液であり、これを蒸して中の虫を殺し、粉砕して粉にして使用しました。

ふしこの用途は広く、お歯黒のほかに皮のなめし、腹下しの薬、染め物の原料、木材の腐食防止などにも用いられました。



図3. 白濁タンニン酸第二鉄の粉末。

タンニンについて

タンニンとは植物に含まれる水溶性成分のうち、蛋白質・アルカロイド(植物に含まれる塩基性含窒素化合物。ニコチン・モルヒネ・カフェインなど)・金属イオンと強く結合し、難溶性の塩を作る性質をもつ化合物の総称です。

タンニンのもっとも重要な性質は、その定義でもある「蛋白質・アルカロイド・金属イオンと結合し、難溶性の塩を作る」ことです。

タンニンはいろいろな用途に利用されています。例えば皮なめし(皮の蛋白質を変成させて「革」にし、持ちをよくする)ですとか、染色(水溶性の色素を布に染み込ませた後、不溶性の沈澱にする)など、工業的な利用が多く行われています。もともとタンニンという言葉自体、皮を鞣すこと(tan)から来ており、タンニンが発見されたのも、これらの有用な性質から盛んに研究されたためだということもできます。

またそれだけでなく、薬としても局所の蛋白質と結合して被膜を作り、粘液の分泌を抑えて、消炎・止瀉作用を持つため、タンニンを多く含む植物には薬用とされるものも多くあります。このタンニンの薬理作用は収斂(しゅうれん)作用と呼ばれています。また最近マスコミで取り上げられることの多いラジカルスカベンジャー作用、あるいは活性酸素除去と呼ばれる作用もタンニン全般に極めて強いものが見られます。

出典:高橋雅夫「化粧ものがたり」(雄山閣)

山賀禮一「お歯黒のはなし」(ゼニス出版)

島根県歯科医師会ホームページ内「歯の歴史資料館」